

支え合いじょうずになろう！

古川 裕子

江戸川区教育研究所教育相談室教育相談員

教育相談という仕事に携わって12年余り。母親としては、長男が小学校に入学し子育ては第2ラウンドに入ったところの私です。

教育相談という仕事は、定期的に相談に来る親子に対して、面接や遊戯療法等を通じて問題解決への援助をする仕事です。夜勤のある助産婦さんと比べれば、仕事を続けていく上での困難は少ないと思いますが、いろいろ悩みはつきません。

まだ次男の保育園の送り迎えの時間があるので、職場にはギリギリにとびこんで、一番に出てきて……という毎日です。家では家事と育児に追われてしまい、仕事へ向けられるエネルギーが以前に比べてダウンしているのは確実です。

助産婦さんも同じだと思うのですが、日進月歩の最新情報を得たり、研修に行きたくても、なかなかそのチャンスが作れません。そんなとき、家事や子育てを実家や夫に手伝ってもらえたり、独身だったりする同僚が、どんどん仕事をこなして、積極的に研修に出かけているのを見ると、自分より自由なことをうらやんでしまうこともあります。

また、あれこれやろうとしたとたん、自分や子どもが体調をくずしてしまって断念するということがよくありました。子どもの顔を見ると、今は子育てにウェイトを置かなければいけない時なのだから、もう少しのしんぼう、と思うのですが、心のどこかに淋しさを感じたり、揺れてしまったりする自分がいます。

共働きの女性にとって家庭は、家事、育児、教育、介護と、次々とクリアしなければならない問題の連続です。不況と言われる中で、女性総合職の結婚退職、パートの首切りの話など、働きたい

と思う女性の置かれている状況はまだまだ前途多難なようです。

また、相談にみえるお母さんたちの話からは、家庭の問題を1人で背負って苦勞している女性の姿が浮かんできます。仕事人間で、家庭人としての自覚のない夫たちとの関係が、子どもの問題の背景として多く語られます。相談中に離婚を決意した人もいます。離婚後の母子の来談が、ここ数年増えています。そうした選択によって自分らしさをとりもどしていく女性も多いのですが、その道は困難であることも事実です。彼女たちにも、先程述べたような仕事をとりまく状況での苦勞が待ち受けています。女性たちは、家庭や労働システムのひずみを個人的な悩みとして引き受けさせられているといってもよいかもしれません。

さらに、働く女性と専業主婦、働く女性の中でもキャリア型と再就職型と、いろいろな選択がなされて、それぞれのグループが自分と違った立場の人とはなんとなくギクシャクしてしまっているようです。女性同士の関係は、複雑とか排他的とか言われることがあります。でもそれは、女性たちの置かれている状況の反映だと思うのです。

今、女性たちは、もっと支え合いじょうずになって、共同戦線をはっていくことが大切なのではないかと思います。例えば共働きの女性は夫との家事分担等をめぐって男性の家庭人としての自覚を促し、キャリアウーマンたちは職場での男性の意識改革を、専業主婦は消費者としての強力なパワーを発揮して……。お互いが補い合う存在として、自分自身のあり方が少しでも女性全体の生き方を自由なものにしていけるように、支え合いじょうずになりたいものです。